（第3種郵便物認可）　2014年6月8日　中日新聞

矢作川 森の健康は

豊田で市民ら調査 最終回

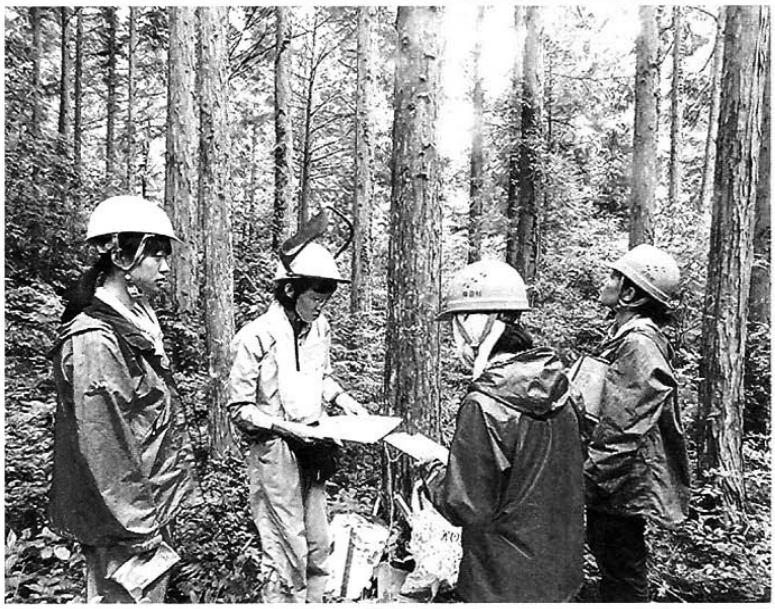
矢作川流域の人工林の状況を調査する「矢作川森の健康診断」が七日、豊田市内の上流域で実施された。調査は二〇〇五年から毎年行われ、今回が最終となる十回目。メンバーらは十月に活動を総括する報告会を同市内で開く。

森の健康診断は〇〇年の東海豪雨の際、矢作川上流の人工林で土砂崩れが起きたのを機に、放置林などがどれだけあるかを調べるのが目的。矢作川水系森林ボランティア協議会（名古屋市中村区）や研究者らでつくる実行委員会が全国に呼び掛けて実施してきた。

この日はあいにくの雨になったが、全国から集まった中学生から八十代までの約二百六十人が参加。豊田市足助地区を中心に約五十地点に分かれ、樹木の幹の太さや高さを測ったり、下草の植生を確認したりした。

「初めは父に連れられて参加した」という名古屋市西区の田中晴峰君(一五)は五年連続の参加。「森の暗さや枝が枯れているのを見て、きれいになった自然と触れ合いたいと思って高校で林業を勉強しています」と話していた。

矢作川での活動をきっかけに、四国の吉野川流域など四十都道府県にもこうした取り組みが広がっている。実行委の丹羽健司代表(六〇)は「十年間の成果は、この水源の森がおかしくなるときに必ず立ち上がってくれる仲間ができたこと」と語った。（吉田瑠里）



ヒノキの林で、木の混み具合について話し合う参加者ら＝豊田市で